令和元年度（2019 年度）

福島大学 FD 活動報告書

～大学教育改善の追求～

2020 年 7 月

福島大学

はじめに

令和元年度（2019 年度）の福島大学における FD 活動の全体を、ここにまとめてご報告いたします。

内容としては、全学 FD 研究会に始まり、各学類・研究科の FD 活動の紹介、各種アンケートの集計結果等となります。

FD は、広義には、教育のみならず、研究、大学の管理運営、社会貢献、大学教員としてのキャリア開発等、大学教員に求められる資質・能力全般の開発を指しますが、今日では「教育改善」という狭義の意味で用いられることが一般的となっています。

この『福島大学 FD 活動報告書』においても、教育改善に焦点を絞って全学、及び各学類・研究科の FD 活動を紹介していきます。

『福島大学 FD 報告書』が「報告書」である限りにおいて、それぞれの活動に価値判断を行うことは適切ではないと思われます。他方で、全学、各学類・研究科の多様な FD 活動には、相互に参照・共有すべき素晴らしい取り組みが多数存在しています。

この『福島大学 FD 活動報告書』を通して、福島大学において実践される多様な FD が発掘・共有され、福島大学における教育がより良いものへと改善されていくことを心より願っております。

教育推進機構　高等教育企画室

目　次

はじめに 1

全学 FD 研究会 3

全学 FD 研究会 4
当日資料 5

各学類・研究科における FD 活動 13

人間発達文化学類 14
行政政策学類 15
経済経営学類 16
共生システム理工学類 18
食農学類 19

夜間主（現代教養コース）における FD 活動 20

現代教養コース教育指導担当者会議 21

基盤（共通）教育における FD 活動 28

教育改善のための学生アンケート集計結果 33

前期集計結果 33
後期集計結果 55

その他の資料 75

新入生アンケート 75

全学 FD 研究会

令和元年度全学 FD 研究会記録

全学 FD 研究会

2019 年度全学 FD 研究会実施要項

１．本研究会全体の趣旨

本学は 2021 年度に受審する機関別認証評価に向けて、昨年度より開始した全学による教育改善のための組織的 FD を継続的かつ発展的に実施していく必要がある。具体的には、「福島大学の新教育制度 2019」で示した教育の内部質保証の仕組みである PDSA サイクルにもとづき、「Study（研究）」と「Action（改善）」の実効性を高めるために本研究会は位置づいている。特に、本研究会では専門教育・基盤教育のカリキュラム FD の実質化に向けて「シラバス」を検討材料に、同じ個別カリキュラムに所属する教員同士で協働的に「Study」を実施する。そして、ここで得られた知見を個々人が自身のシラバス改善へと結びつける（＝「Action」）一連の流れが想定されている。

２．実施内容

① 実施日：2019 年 10 月 31 日（木）
第一部【情報共有】10:00～11:00@L4
第二部【専門教育カリキュラム FD】11:15～12:45
第二部【基盤教育カリキュラム FD】13:45～15:45

② 対象：非常勤講師を除く本学の全教員、教務課員

③ 関連資料：
１．福島大学シラバス記入要領
２．個別カリキュラム毎の成績分布表
３．2019 年度シラバス
４．2018 年度全学 FD 研究会で作成された各プログラムレビューシート
５．全学 FD 研究会提出用カリキュラム FD シート：提出〆切 11 月 15 日（金）
６．個別カリキュラム毎の成績分布確認票
７．個別カリキュラム毎の成績評価に関わる共通エビデンス（例：グローバル教育 A における SELF）

④ カリキュラム FD の方向性：
ⅰ）2019 年度のシラバス・実施した授業に関して協働的な省察を行う（成績分布、good practice や学生の傾向、具体的な改善点等の共有。但し、個別カリキュラム毎に論点は多少異なる）。

ⅱ）その上で、次年度授業担当者の授業計画検討・シラバス作成に資するよう「全学 FD 研究会提出用カリキュラム FD シート」を作成する（その際、DP ポイント配分や成績評価の方法，成績評価の割合といった共通指標の設定が求められる個別カリキュラムは、可能な限り全体で合意することを目標に検討を進めること。それ以外の個別カリキュラムは、シラバス記入の際に参考・モデルとなり得る情報をまとめること）。

※2019 年度は前期の授業を中心に検討。2020 年度の全学 FD 研究会からは 2019 年度の後期授業を含めた 10 月開始の FD サイクルが機能する予定である。

最終出席率：218／257（84.8%）

当日資料

福島大学
全学FD研究会

2019年10月31日

本学の教育改革の現状と期待

理事・副学長（教育・学生担当）　三浦浩喜

報告する内容

- **機関別認証評価についての確認**
- **Lポートフォリオの活用**
- **新GPA制度と成績分布**
- **学修成果の可視化**

機関別認証評価についての確認

- 2021（令和３）年　**機関別認証評価**を受審
- 2020（令和２）年　**法人評価（暫定評価）**を受審

- 認証評価は「**車検**」：「合格」か「不合格」しかない
  （法人評価：第4期の**運営費交付金**に影響）
- すべての授業が全学の教育目標や学類のDPに紐付けられ、**厳格に評価されていること**。そのためのルールがしっかりと制定されていること。
- **当該大学で制定されたルールが守られ、しっかりと実行に移されていること。**

3巡目の認証評価の特徴

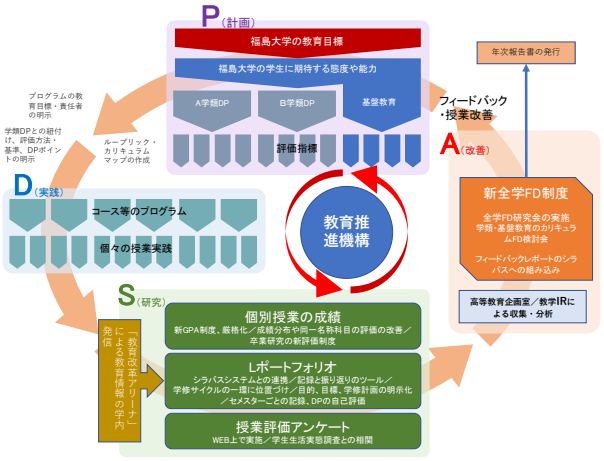
- 6領域中2領域（27基準中13基準）が**質保証と学修成果**に関わるもの。
- これまでは記述が中心であったが、3巡目はほぼ**学修成果のエビデンス**の提出のみ。「作文（**言い訳**）」は1基準につき400字までに制限。
- 平成28～令和２年度までのエビデンスの提出が義務づけられる。
- 成績分布資料の提出のみならず、その分布について**組織的に確認している資料**も提出義務。

3巡目の認証評価の特徴

- 教育の内部質保証は「全学」「学類」「プログラム」「個別授業」の**4階層**でチェック
- 原則「**非公表はなし**」……大学院の個々の授業の成績分布も提出
- 一部基準を満たしていないものでも、**総合的に判断**。単純な積み上げではない。
- **全てのシラバスをチェック**。白紙部分があると説明を求めるかもしれない。

本学の質保証制度課題への対応

- 質保証の責任を負う責任主体・組織の曖昧さ
  →教育推進機構の設置、種々の規程の整備
- 質保証に関する要求事項の高度化、専門化への対応
  →高等教育企画室の設置
- 「PDCAサイクル」のうち、「A（カリキュラムへのフィードバック）」がきわめて弱い
  →全学FD研究会の開催、カリキュラムFD検討会
- GPA制度にたいする信頼の弱さ
  →新GPA制度、シラバスシステムの改訂
- 体系的にエビデンスをまとめるしくみがない
  →認証評価対応WGの設置、アンケートの一元化



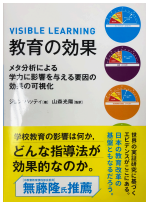
Lポートフォリオの活用

- 学修の**リフレクション（振り返り）**ツールとしてLiveCampus上に設定
- 目標を設定させ、到達度をはかり**学修目的を意識化**
- 「キャリアノート」に履歴を記録
- **セメスターごと**にルーブリック等で自己評価
- 自己評価に基づいて**個別面談**
- 有効活用・改善のためのＬポートフォリオＷＧの立ち上げを予定

どんな教育方法が効果的なのか

ジョン・ハッティ『教育の効果　メタ分析による学力に影響を与える要因の効果の可視化』より

1　**能力レベルの自己評価**
3　指導改善のための**形成的評価**
4　**マイクロティーチング**
8　**教師の明瞭さ**
9　**相互教授法**
10　**フィードバック**
11　**教師と学習者の関係**
12　**分散学習と集中学習**
13　**メタ認知的方略**
14　過去の学力



※138項目中

どんな教育方法が効果的なのか

ジョン・ハッティ『教育の効果　メタ分析による学力に影響を与える要因の効果の可視化』より

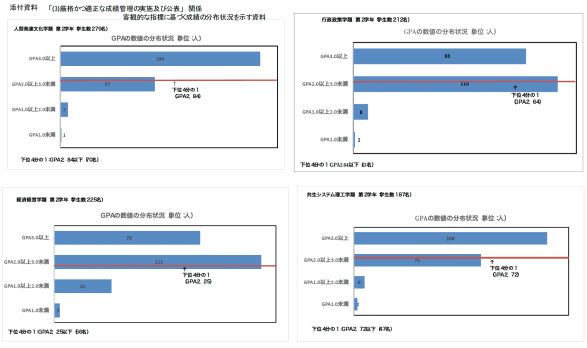
17　創造性育成プログラム　……
18　**自己言語化と自己質問**
19　**現職教育**
20　**問題解決的指導**
21　学習者を分類すること
23　**教授方略**
24　**協同的な学習**
25　**スタディスキル**
26　直接教授法
30　解法つき例題の提示
121　能力別学習集団編成
124　教員養成
125　教科内容の知識
126　遠隔教育
127　学校外の学習プログラム
132　学習者自身による学習の管理
135　生活保護
137　テレビ視聴

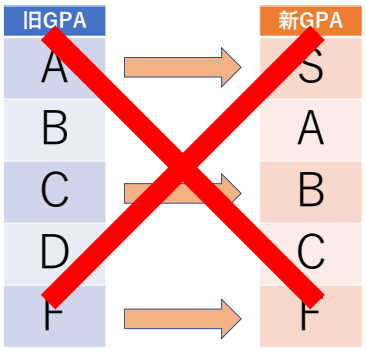
新GPA制度と成績の分布

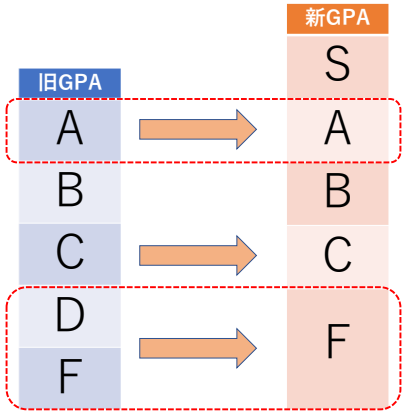
		2018カリまで		
	評語	基準	GP
合格	A	きわめて優秀	4
	B	優秀	3
	C	望ましい水準に達している	2
	D	望ましい水準に達していないが、不合格ではない	1
不合格	F	不合格	0

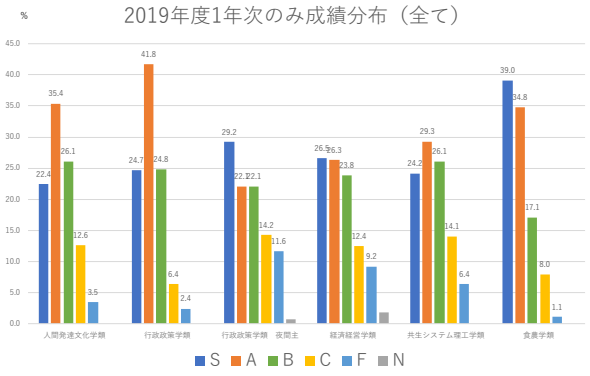
		2019カリより		
	評語	学修成果	評点	GP
単位認定	S	単位認定基準を満たし、かつすべての項目で優秀な学修成果をあげた	90～100	4
	A	単位認定基準を満たし、かつ多くの項目で優秀な学修成果をあげた	80～89	3
	B	単位認定基準を満たし、かついくつかの項目で優秀な学修成果をあげた	70～79	2
	C	単位認定基準を満たす最低限の学修成果をあげた	60～69	1
単位不認定	F	単位認定基準の学修成果をあげられなかった	～59	0

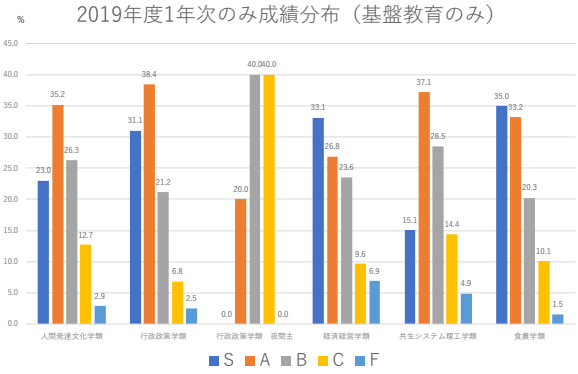
旧GPA制度と成績の分布









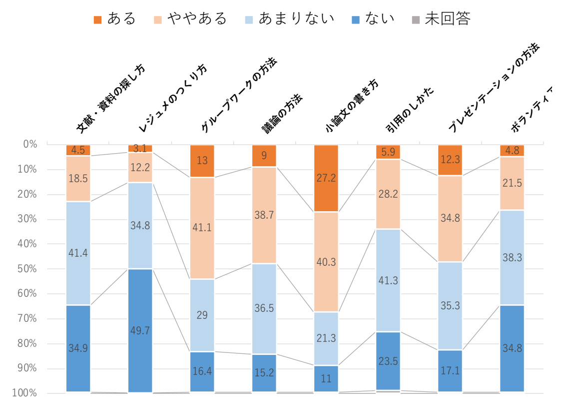


- **全学で一本化したGPA制度**の運用によって、学生の不公平感が解消し、GPに対する信頼性を向上
- 「**高等教育の無償化**」で支援を受ける学生の支援の継続にもGPAが関係してくる
- **民間の財団による奨学生**はGPAの数値が要件。財団による各大学のGPAにたいする調査が入っている
- 安易に満足感を与えるのではなく、学生へ課題意識を持たせることも重要
- 各大学でのGPA活用も問われている。

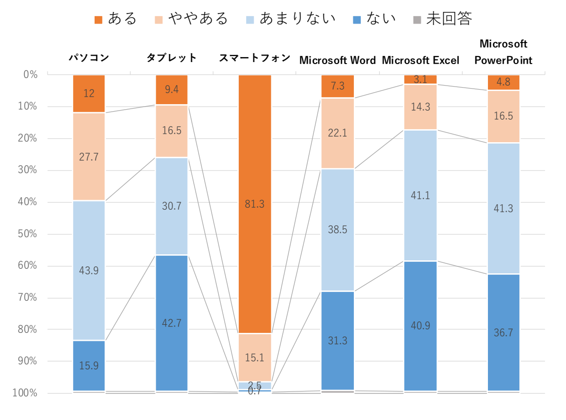
学修成果の可視化

- エビデンスにもとづいて課題を共有し、当該大学の教育について、**共通の課題意識**をもつ
- エビデンスは、定量的なもの（数値）と定性的なもの（自由記述など）がある。重要性は同等である。
- 共通課題に対して、個別の授業やコースカリキュラムで**取り組み可能な方策**を考える
- 例）福島大学の学生は素直で真面目であるが、チャレンジ精神が弱い。これを教育でどのように克服するか。

新入生アンケートから　**これまでの学修経験**



新入生アンケートから　**ICTの活用**



大項目	中項目	4 応用レベル	3 実用レベル	2 ミニマムレベル	1 スタートレベル	0 克服すべきレベル
最新の専門知識及び技術（専門知識・技術）	資料の収集・分析・統合、語学、ライティング、プレゼンテーション、ディスカッションなどの基本的なアカデミック・スキル	ほとんどのアカデミックスキルが十分に身についており、他者にアドバイスすることもできる	基本的なアカデミック・スキルを身に付けており、ある程度実用レベルに達している	授業以外でもアカデミック・スキルを身に付けようと努力している	大学で学修するためにアカデミック・スキルを身に付ける必要性があることを理解できる	基本的なアカデミック・スキルが身についていない
	最新の学問的知識や技術を身につけ、現代社会における自らの専門領域の役割を考え、知識や技術を改善したり更新したりする態度	自身の専門分野のより新しい知見を得ようとしており、それを社会に役立てようとしている	自分の専門分野では非専門とする者よりも確実に知識や技術を持っている	自分の専門分野に関する本やインターネットの記事を読んだり集めたりしている	自身が大学で身に付けるべき専門性を意識している	自身の専門性が曖昧で、力や意欲も足りない
本質を見極めるための教養と学際性（教養と学際性）	物事の本質を見極めるための探究的態度と、自らの専門性や技術を対象化・客観化させるための幅広い教養の定着	身近な事象や社会的事象を幅広い教養で受け止め、専門にこだわることなく探究しようとする	人文科学や社会科学、自然科学と自分の専門を関連付けることができる	自分の専門分野以外の本やインターネットの記事を日常的に読んでいる	教養を身に付ける必要性を理解している	探究的態度が弱く、教養の必要性を理解していない
	他領域の学問を学ぶことで自らの専門性を拡張させ、物事を総合的に、かつ俯瞰的に見るための知識のネットワーク構築	専門性を拡張させ、物事を総合的に見るために、幅広い知識のネットワークが構築できている	自身の専門領域以外に関心をもつ学問分野を持っており、知識をつなぎ合わせることができる	レポートを書くとき、自分の専門分野以外の領域にも言及することができる	知識と知識を関連付けることの必要性を理解している	知識が断片的で、自分の専門分野の意味も理解できていない
協働的な問題探究（社会的スキル）	日常生活や国際社会に対する問題意識や、自らの専門性を生かして問題を発見し、問題解決に取り組むためのスキル	幅広い問題意識や問題発見・解決のスキルを実際の問題解決に活用できる	問題の持つ多様な側面を分析し、自分なりのアプローチで問題解決に向かおうとする	自分の関わる日常的な問題について粘り強く問題解決に向けて努力することができる	日常生活や国際社会に対する問題意識を一定程度もっている	日常生活や国際社会に対する問題意識が弱い
	高度なリーダーシップやフォロワーシップなどのグループワークのスキルや、他者との協働による問題探究の実践	高度なグループワークのスキルが身についており、他者と協働して問題探究できる	グループワークでリーダーシップを発揮することができ、全体がうまくいくように工夫できる	グループワークにおいて、自身の役割を意識して参加することができる	少々苦手であってもグループワークに参加することができる	グループワークのスキルが身についておらず、他者との協働が苦手である
社会の改善につなげる創造性（認知的スキル）	事実にもとづく客観的な社会の把握、および多面的にアプローチするためのデータ解析やフィールドワークなど様々なツールの駆使	様々なツールを駆使して、事実に基づき客観的に社会を把握できる	様々な知見に基づいてデータを分析し、事実に即してアイディアを生むことができる	本やインターネット、フィールドワークなどから、より客観的なデータを得ることができる	物事を一面的にとらえるだけではまずいことを知っている	主観的で、物事の把握が一面的である
	社会と自身の関係を問い直し、常識にとらわれることのない独創的で未来志向的な思考方法と失敗を恐れないチャレンジ精神	独創的で未来志向的な思考方法と失敗を恐れないチャレンジ精神を持ち、社会に貢献しようとする	自分の考えを理路整然と述べることができ、他者との違いを調整できる	うまく発表できないまでも、理屈に合った自分なりの考え方を持っている	他人に流されない自分なりの考え方を持とうとしている	一般的な考え方に流されやすく、これまでのやり方にこだわる
市民としての主体的態度（態度や価値観）	東日本大震災及び東京電力福島第一原子力発電所事故の被災地に学ぶ者として、被災の概要を知り、被災地に寄添い共感的にアプローチする態度	被災地に学ぶ者として、現状を充分に理解しており、被災者に共感的にアプローチできる	被災地の特定分野や特定地域に関心をもっており、復興に必要な術を考えることができる	関係授業、フィールドワークや学習会に参加するなどして自分なりに情報を集めたことがある	福島大学が東日本大震災・原発事故の被災地にあることを意識している	東日本大震災への関心が薄く、被災地への共感が薄い
	地域の抱える課題を社会が直面する21世紀的課題として捉え直し、主体的に探究しようとする態度	地域の抱える課題を社会が直面する21世紀的課題として捉え直し、主体的に探究しようとする	身近な課題を世界が直面するグローバルな課題と関連付けてとらえ、探究しようとする	すべてではないにせよ地域や社会の抱えている課題の現状を知っている	少子高齢化や環境問題などの現代社会が抱えている課題に関心をもっている。	日本や世界全体が直面している課題への関心が薄い

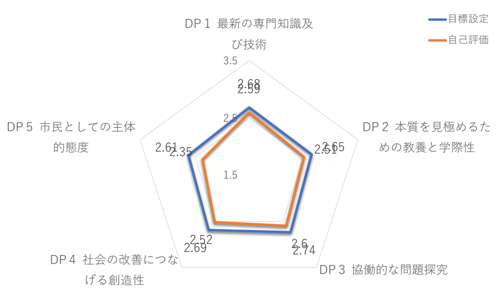
「むらの大学」の受講者・未受講者の1年間の自己評価の差異

「地域の問題解決に関わるルーブリック評価」の指標を用いて、事前学習時（フィールドワーク前）・科目終了時の地域の問題解決能力の状態を自己評価で確認した。

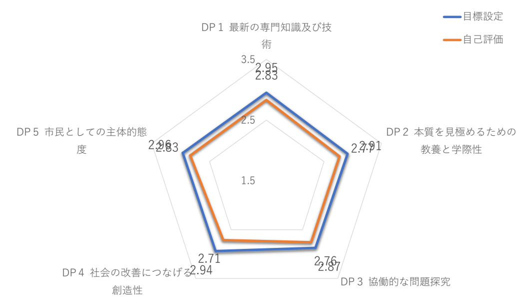
1. 地域課題を発見する力……地域にあらわれる多様な課題を発見する力
2. 地域を分析する力……科学的にかつ総合的に地域課題を理解する力
3. 地域を興す力……地域課題のミッションを明らかにし、自ら主体的に解決するために行動する力
4. 地域をつなげる力……地域課題を解決するために、多様なセクターと協働する
5. 地域を伝える力……地域課題の社会的解決に向けて、現状や地域の主体的な取り組み

	レベル0	レベル1	レベル2	レベル3	レベル4	レベル5
地域課題を発見する力（発見する力）	地域の具体的な課題に関心がない	東日本大震災・原発事故、地域再生に対して関心がある 2.34	被災地や地域に対する自分の関心を明らかにできる 未受講者 2.88	2.76 被災地や地域に対する自分の関心事に対して、情報源・リソースから…ことができる 受講者	疑問点を解消し、既存の課題の背景や要因を自分の視点で深く考えることができる 3.96	組織的に調査を行い課題の本質を同定する
地域を分析する力（理解する力）	マスコミなどで流される情報がすべて	東日本大震災・原発事故の被災の概要を自ら学んだことがある	一つの情報と他の情報をつなげて考えられる 2.57 2.71	「解のない問い」に対して議論できる 2.87	自らの見聞と先行研究をつないで考え、地域課題を、論拠を持って説明できる 3.88	現地の声を深く理解し、活動につなげられる
地域を興す力（行動する力）	自分が行動したところで何も変わらない	与えられた課題を自ら進んで取り組む	与えられた課題を超えて取り組む 2.42 3.00	仲間とともに大学内外の活動に取り組む 2.69	現地での活動経験を持ち、具体的な成果の実現にむけて、課題にコミットする 4.08	自治体や企業などと協働し実質的な実践を行う
地域をつなげる力（協働する力）	人と協力するのは面倒だと思う	友達とグループワークを行うことに抵抗がない	考え方の違いを超えて協働作業に取り組む 2.95	目的や目標を共有し、その達成にむけて協働に取り組む 3.14 3.42	活動で生じる困難な問題を組織的に解決する 3.83	立場の違いを生かし多面的に実践し、成果を実現する
地域を伝える力（発信する力）	発信することや記録をとることの意味がわからない	情報を記録したりまとめたりすることができる	学習内容や経験をまとめて他者に発表できる 2.75 2.92	事実と意見を分けて他者に説明することができる 3.01	インターネットなどの媒体を活用し、事実や自らの見解を社会に向けて発信できる 3.88	媒体を駆使して結果に結びつく発信を行う

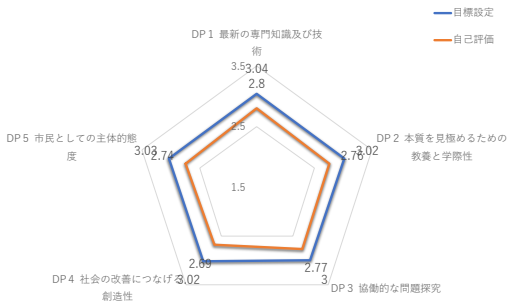
人間発達文化学類



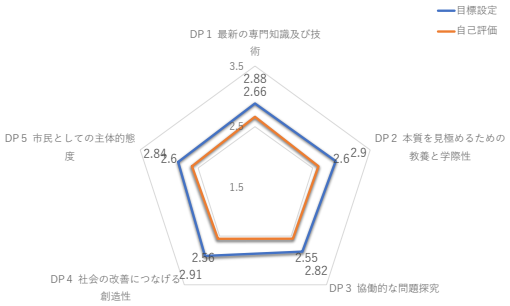
行政政策学類



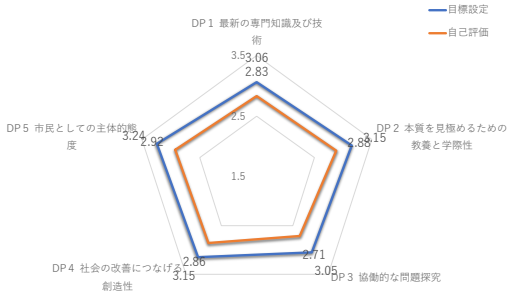
経済経営学類

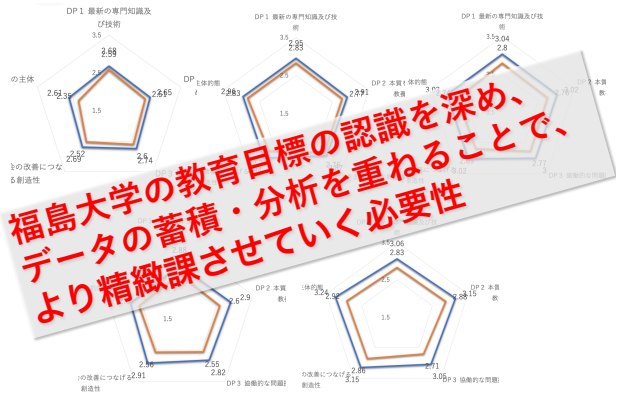


共生システム理工学類

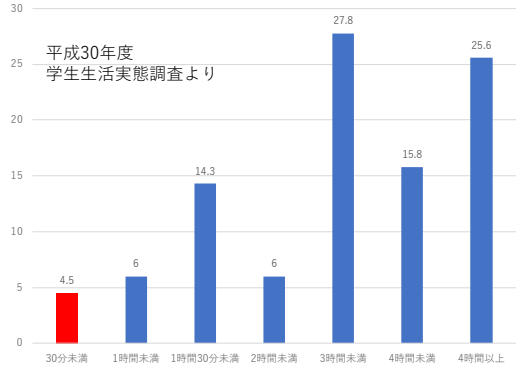


食農学類

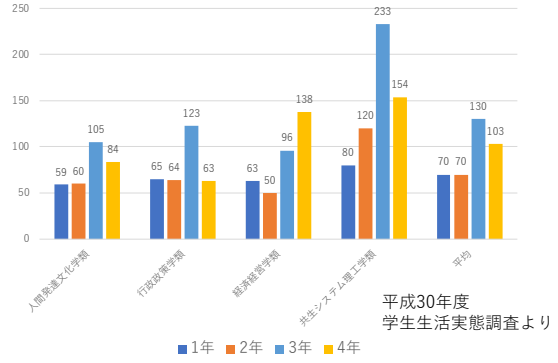


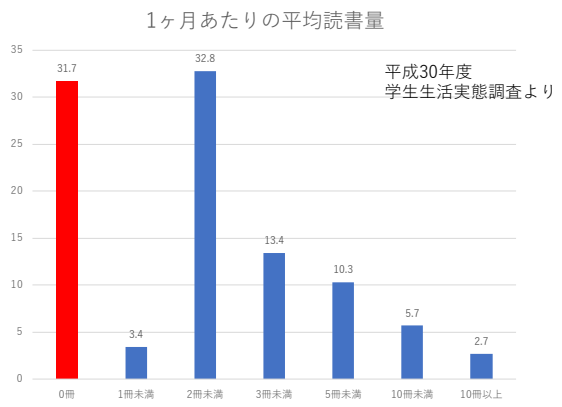


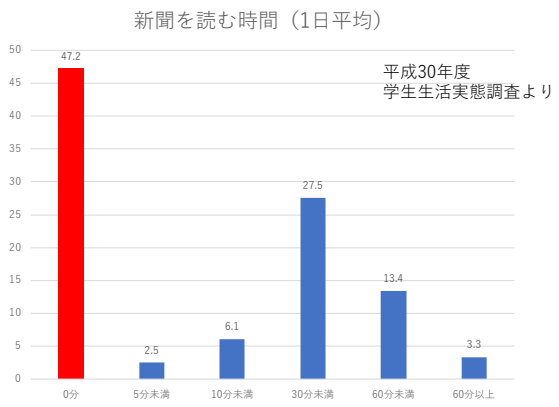
平均学習時間（平日と休日をならした平均）



各学類・学年の1日あたりの平均学習時間







授業（ふくしま未来学入門Ⅰ）の学生コメントから

……つらい状況こそ、自分を成長させることができると聞き、**自分はこの大学でどのように成長したいのか、何を成したいのか、改めて考えさせられました。**私もこれから社会が陥っている問題に向きあい、自分の意見を言わなくてはならなかったり、まだ誰も知らないことを発見していかなければならないので、そのときに自分を成長させ、つらくても向き合い続けたいと思いました。（食農学類１年）

私は、毎日同じことを繰り返しています。授業に出て、バイトをして、家に帰り寝る、今日の講義を受けて、とてもつまらない人生だなと思いました。……大学の夏休みは２ヶ月近くあり、とても長いです。私もこの夏休み、**新しいことに挑戦してみたい**と思わされる講義でした。（経済経営学類１年）

……今の私は**常に安定した生活を送りたいという気持ちが強かったです。**ですが、この授業で、**どんな困難にも挑戦することが自分の成長につながる**ということを改めて気づかされ、もっと私も積極的にいろんなことに挑戦しなくてはいけないと思いました。（食農学類１年）

……ビデオを観て驚いた。**福島の未来は明るいと思った。負けていられない。自分も何かに挑戦したいと思った。**この授業は世界中で開いてほしい（笑）（共生システム理工学類１年生）

……**現在、私は楽なこと、すぐにできることに取り組んでしまっています。困難なことに取り組むのは怖いし、たいへんだという思いがあるからです。**しかし、今回の講義を受けて、本当の喜びのためにはたいへんなことも行っていかなければならないと思いました。……（人間発達文化学類１年）

……自分は**今まで壁にぶち当たったことはありますが、いかに楽にのりこえるか、また逃げ道はないか、等としか考えたことがなく、いわゆるチャレンジ精神があまりありません。**……新しい力が今後の教育現場で重要になってくることは、現在の教育問題からも明らかなことであるので、それを教えられる教師となるべく、この４年間の大学生活、**自ら壁を立ててぶち壊して突破できるようにがんばりたいと思います。この講義が自分にとってのターニングポイントになったらいいなと、本当に思いました。**（人間発達文化学類１年）

……私も何かしたい！と強く感じた。そしてＡさんのお話を聞いて、すごくあっという間に時間が過ぎてしまい、私もあのようなプレゼンができるようになりたい！と強く思った。**直感で、理由もないが、動いてみよう！と思った。もっと目をひらいて、積極的に様々な活動に参加しようと思った。**……（行政政策学類１年）

結　語

- **安定志向**の学生が増加している
- その中でも、学生たちは日々の授業や活動の中で、**様々な刺激**を受け、何かにチャレンジし、**自分を成長させたい**と思っている
- それを受け止め、さらに**伸ばすカリキュラム**が必要
- 現状の中で物事を考えるのではなく、学生たちが社会に出て直面するであろう、**将来的な課題との関連でカリキュラムを位置づけ直すべき**
- 内部質保証は、個別授業の改善だけではなく、**複数授業の相互補完**によって成立する。**チームワーク**こそがその本質

2019年 全学FD研究会

カリキュラムFD検討会の進め方

2019年10月31日（木）
教育推進機構　高等教育企画室
高 森 智 嗣

カリキュラムFD検討会の基本的方向性

カリキュラムFDの基本的方向性

❑ PDSAサイクルにおけるStudyとAction
- 福島大学における教育制度の変更
- これまでを振り返り、これからを検討する。

① シラバス・授業実践に関する協働的な省察
- Good Practiceの共有
- 成績分布の確認
- 改善点等の共有

② カリキュラムFDシートの作成

カリキュラムFDの基本的な流れ（例）

【Step 1】授業実践事例の共有

授業実践における
①工夫した点　②課題　③受講生の実態　④その他
を共有する。

【Step 2】成績分布の確認・検討

成績分布表に基づいて、成績分布を確認・検討する。
成績分布の状況から、望ましい水準や成績評価の方法等について意見交換する。

【Step 3】カリキュラムFDシートの内容検討

カリキュラムFDシートの内容について検討する。
議論になった点について確認する。

【事　後】カリキュラムFDシートの完成

カリキュラムFDシートの作成

提出用カリキュラムFDシートの作成

① DPのポイント配分	
② カリキュラムの概要	
③ 望ましい水準	
④ 成績評価の方法	
⑤ 成績評価の割合	
⑥ 議論になった点	

① DPのポイント配分

・当該プログラムが、各DPにどの程度結びついているか、関連しているかを、合計100%になるように配分する。

（例）

最新の専門知識及び技術（専門知識・技術）	55%
本質を見極めるための教養と学際性（教養と学際性）	20%
協働的な問題探究（社会的スキル）	15%
社会の改善につなげる創造性（認知的スキル）	10%
市民としての主体的態度（態度や価値観）	0%

＊ 上記は全学DP

② カリキュラムの概要の記述

❑ 当該カリキュラムで扱う内容を記述する。

（例）
当該カリキュラムでは、〇〇、〇〇、…等の〇〇に関する基礎的な内容を扱う。　etc.

＊ 専門科目の場合は、「コースの概要」を転載可。

③ 望ましい水準の記述

❑ 当該カリキュラムにおいて、該当するDPに基づいて「身につけるべき知識・技能・態度等の諸能力」の水準について記述する。

（例）
1．○○を理解している。
2．○○ができる。
3．○○を修得している。　etc.

9

④ 成績評価の方法の記述

❑ 望ましい水準に掲げた諸能力がどの程度身についたかを、どのような方法で評価・測定できるかを記述する。

＊ 当該プログラムにおける評価の基本方針や評価の客観性を担保するための方策を検討する。

＊ 「どのような評価方法があり得るか」について各人がアイディアを出し合う。

（例）
1．○○を理解している：毎回の小テスト／授業外の課題
2．○○ができる：プレゼンテーションの内容／レジュメの内容
3．○○を修得している：最終課題の点数／レポートの内容

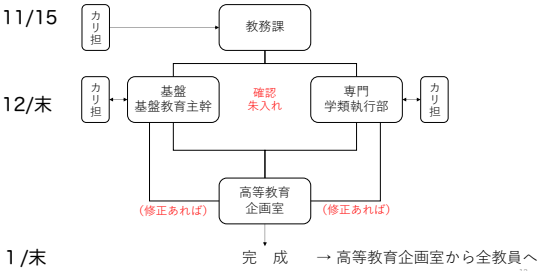
10

⑤ 成績評価の割合

評語	学修成果	評点	GP
S（15%）	すべての項目で優秀な学修成果をあげた	90～100	4
A（○%）	多くの項目で優秀な学修成果をあげた	80～89	3
B（○%）	いくつかの項目で優秀な学修成果をあげた	70～79	2
C（○%）	最低限の学修成果をあげた	60～69	1
F（○%）	学修成果をあげられなかった	～59	0

11

レビューシートの提出



12